

瀬戸内町内の近代遺跡シンポジウム

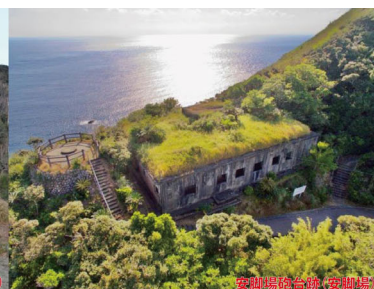
～奄美大島要塞・大島防備隊基地跡の
調査成果とその価値について～



佐世保海軍軍需部大島支庫跡(久島)



西古見砲台跡(西古見)



室町砲台跡(室町)



手宮洞窟本庫跡(手宮)



第18高橋隊基地跡(岩之浦)



大島防備隊本部跡(瀬相)

★感想をお聞かせください(2月末まで)

お手数ですが、右の Google フォーム、
またはメール(自由記述)送信をお願いします
メールアドレス: maizou@town.setouchi.lg.jp

アンケート用フォーム



★瀬戸内町公式 YouTube

本日の内容は、後日配信されます。ぜひ再度ご覧ください。
視聴は右のフォーム、または
瀬戸内町公式 YouTube を検索ください

YouTube視聴用フォーム



瀬戸内町内の近代遺跡シンポジウム プログラム

- 13:00～13:05 開会のあいさつ 瀬戸内町教育長 中村洋康 (05)
13:10～13:15 歓迎のあいさつ 瀬戸内町町長 鎌田愛人 (05)

第一部 瀬戸内町内の近代遺跡調査報告及びその価値

1. 調査成果報告 (20)

- 13:20～13:30 内容確認調査（発掘・測量）の成果報告 (10)
鼎丈太郎（瀬戸内町教育委員会）
13:30～13:40 文献史料調査の成果報告～絵図と写真を中心に～ (10)
鼎さつき（瀬戸内町教育委員会）

2. 瀬戸内町の近代遺跡の価値 (60)

- 13:45～14:05 軍事遺跡の眺め方～なぜか無口な遺跡群～ (20)
服部正策（元東京大学准教授、元町文化財保護審会長）
14:10～14:30 日本史学・歴史教育から見た、遺跡の価値 (20)
土田宏成（聖心女子大学 教授）
14:35～14:55 軍事史から見た、遺跡の価値 (20)
齋藤達志（防衛研究所 所員）

休憩 (10)

- 14:55～15:05 休憩 (10)

3. その他地域の事例紹介 (20)

- 15:05～15:25 地上から水中へ (20)
木村 淳（東海大学 准教授）

4. 総括 (20)

- 15:30～15:50 奄美大島要塞跡は何がすごいのか-期待と課題- (20)
赤司善彦（大野城心のふるさと館館長）

休憩 (15)

- 15:50～16:05 休憩 会場設定 (15)

第二部 総合討論 (40)

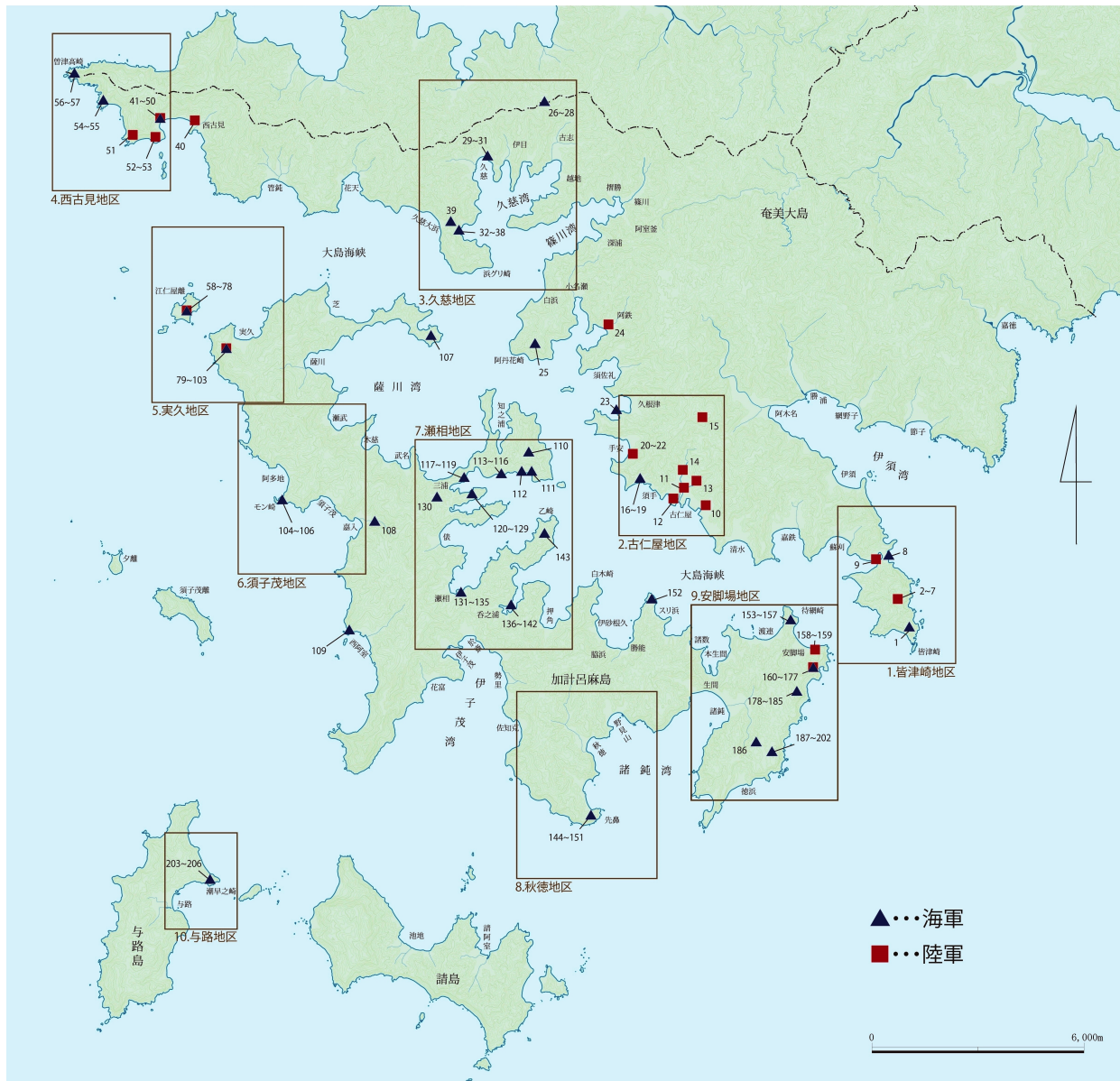
1. パネルディスカッション (20)

- 16:10～16:30 瀬戸内町内の近代遺跡パネルディスカッション (20)
赤司善彦（大野城心のふるさと館館長）
土田宏成（聖心女子大学 教授）
齋藤達志（防衛研究所 所員）
服部正策（元東大准教授、元文化財保護審議会会長）
木村 淳（東海大学 准教授）
（進行：鼎丈太郎）

2. 質疑応答 (20)

- 16:30～16:50 質疑応答 (20)

- 16:55～17:00 閉会のあいさつ 社会教育課課長 保島 弘満 (05)



瀬戸内町の軍事施設位置図及び地区設定図（遺跡数ではありません）



瀬戸内町近代遺跡調査検討委員会
現地確認調査（西古見砲台跡）



瀬戸内町近代遺跡調査検討委員会
文献史料調査（防衛研究所）

内容確認調査（発掘・測量）の成果報告

瀬戸内町教育委員会 かなえ じょうたろう
鼎 丈太郎

1. 補助事業概要

事業の目的 瀬戸内町内の近代遺跡について、調査（分布調査、内容確認調査、文献史料調査）を行い。瀬戸内町の近代遺跡の実態を明らかにする。また、調査で得られた成果は、遺跡の保護・活用や郷土教育などへ活用する。

- ・2014（H26）～2016（H28）年度 分布調査（206箇所の軍事施設跡確認）
※調査成果を整理して、52遺跡（奄美大島側19遺跡、加計呂麻側33遺跡）
- ・2017（H29）～2021（R3）年度 6遺跡について内容確認調査

2. 近代遺跡とは

文化庁 我が国の近代史を理解する上で、欠くことのできない重要な遺跡。

大きくは「政治」「経済」「社会」「文化」「その他」で区分し、遺跡の性格により、さらに11の分野に分けられる。 ※軍事に関する遺跡は「政治」の分野に入る。

- ・対象：幕末・開国頃からアジア・太平洋戦争（第2次世界大戦）終結頃まで
- ・大正期の軍事関係遺跡の数：8件。要塞は、2件（奄美大島要塞跡含む）。

瀬戸内町 久慈白糖工場跡など、幕末・明治初期に建設された遺跡が残っている。瀬戸内町の近代遺跡は「軍事」に関する施設跡が多く残っていることが分かったため、現時点では、町内の軍事遺跡（軍事施設跡）を指して「近代遺跡」としている。

- ・なぜ調査してこなかったのか？：埋蔵文化財保護行政では、中世より古い時代を主に調査・研究するため。埋蔵文化財として取り扱うには新しすぎたため。

3. 調査方法

- ・分布調査：文献・伝承等で遺跡が存在しそうな地区を中心に踏査する。
- ・発掘調査：確認できた遺跡の構造等を解明するために試掘・発掘調査を行う。
- ・測量調査：地形の測量（遺跡の立地）と構造物の計測・製図を行う。
- ・整理作業：調査成果（遺物・データ等）を活用できるように、資料を整理する。
- ・比較検討：他施設や他地域の施設との比較を行い、遺跡の特徴等を抽出する。

最新技術 瀬戸内町の近代遺跡は、普段人が訪れない山奥に多いため、ハブや崖など危険が伴う。下記の調査方法では、近代遺跡を安全に調査することができる。

- ・ドローン測量：上空からレーダーで、座標や標高を計測、空中写真撮影も可能。
- ・地上レーダー：設置箇所からレーダーで360度計測、壕内の調査も可能。
- ・地中レーダー：掘削を行わなくても地下の状況を把握可能。

4. 内容確認調査成果

○佐世保海軍軍需部大島支庫跡（久慈）

佐世保海軍軍需部大島支庫跡は、大島海峡の奄美大島側ほぼ中央に位置し、大島海峡の中でも特に良港として知られている、久慈湾に立地している。

水源地での取水 → 濾過 → 貯水 → 艦船 への給水という、水利システムを確認した。島内産ではない2種類の規格の赤レンガや複数の刻印を確認することができた。赤レンガの産地同定が可能となると、運搬・流通ルートが解明できる可能性がある。

佐世保海軍軍需部大島支庫は、台湾航路の重要性の高まりや戦艦による戦闘が主流となった明治期の需品運用状況を示す重要な遺跡である。

○西古見砲台跡（西古見）※国史跡指定（答申）

西古見砲台跡は、奄美大島の西南端に位置し、尾根筋から山裾、岬一带に至る広範囲に分布する。

今回の調査により西古見砲台を構成する施設の把握が行われたことで、大正期の砲撃システムについて検証することができたと言える。

奄美大島要塞の防備のために配置された実久砲台や安脚場砲台などとの比較も進めていく。比較も進めていきたい。

○安脚場砲台跡（安脚場）※国史跡指定（答申）

安脚場砲台跡は加計呂麻島東端に位置し、尾根筋から山裾、岬一带に至る広範囲に分布する。一部の施設が公園化され公開されているが、未管理の施設も存在する。

安脚場砲台は、旧陸軍により奄美大島要塞の防衛のために築かれた砲台である。

同様の目的で築かれた西古見砲台とは、立地や構築方法にも違いがあることが明らかとなった。また、潜水艦対策として、旧海軍が防備衛所を設置している。

○手安弾薬本庫跡（手安）※国史跡指定（答申）

手安弾薬本庫跡は、大島海峡ほぼ中央の奄美大島側に位置する。

手安弾薬本庫は、奄美大島要塞の弾薬本庫であり、大島海峡に築かれた各砲台への弾薬供給や火薬等の保管を行う施設として構築された。手安弾薬本庫や奄美大島要塞司令部、海峡の東西入口に配備された砲台は、連動して運用され、大島海峡の地形を最大限に活かした防御システムを構築していた。

○第18震洋隊基地跡（呑之浦）

第18震洋隊基地跡は、大島海峡に3か所配備された震洋隊のうちの一つである。大島海峡のほぼ中央、加計呂麻島側に位置する呑之浦湾の両岸に配備された。調査において、震洋艇格納壕の構造について確認することができた。

震洋艇格納壕の構築方法や規格について確認することができ、太平洋戦争末期の特攻攻撃隊の具体像に迫ることができたのは重要な成果である。

○大島防備隊本部跡（瀬相）

大島防備隊本部跡は、大島海峡のほぼ中央、加計呂麻島に位置し、汀線から山腹までの広範囲に分布している。現在、一部の施設が慰霊碑公園として公開されているが、大半の土地が湿地であり、未管理の施設が存在する。

大島防備隊本部跡の調査において、太平洋戦争に突入する時期の旧海軍基地の様相を確認することができた。大島防備隊の本部であることから、戦闘指揮関係だけでなく、物資保管・補給や修繕など多くの施設を確認することができた。

ただし、今後、より詳細な調査を行な調査が必要である。

5. 調査のその後

- ・遺構内環境調査（データロガー）遺構内環境変化観測
- ・3Dスキャンによる遺構図作成 遺構の変化確認、VR等安全な公開
- ・X線による顔料調査 非破壊による分析、修復等への活用
- ・水中遺跡（飛行機など）
- ・分布調査で判明している、保存状態等の良い遺跡の調査
（実久砲台跡、海軍給水ダム関連施設跡、皆津崎望楼跡、与路砲台跡など）

調査風景 1

○佐世保海軍軍需部大島支庫跡（久慈）



空中写真1（久慈湾）艦隊泊地内定湾



空中写真2（水溜跡）約50屯×6槽

○西古見砲台跡（西古見）※国史跡指定（答申）



第2砲座跡（発掘調査風景）



第1砲側庫跡（上部掘削：白砂確認）

○安脚場砲台跡（安脚場）※国史跡指定（答申）



第1砲側庫跡（発掘調査風景）



不明施設（旧海軍機銃跡の可能性有）

調査風景 2

○手安弾薬本庫跡（手安）※国史跡指定（答申）



第2弾薬庫跡通路（コンクリートブロック巻き）



第3弾薬庫跡（剥離及びびアスファルトフェルト）

○第18震洋隊基地跡（呑之浦）



格納壕跡内部（素掘り・坑木跡）



格納壕跡（滑台、柱穴確認状況）

○大島防備隊本部跡（瀬相）



土塁跡・弾薬庫跡（ドック周辺）



第1防空壕跡・コンクリート柵

文献史料調査の成果報告

～絵図と写真を中心に～

鼎さつき（瀬戸内町教育委員会）

はじめに

瀬戸内町には、多くの「近代遺跡」が残されています。ところで、「近代遺跡」とは何かと申しますと、時期区分をもとにしますと、明治より第2次世界大戦終結までに作られた構築物の内、遺跡に認定されたものを指します。この期間に作られた瀬戸内町内の遺跡で、最も多いのが「軍事」に関する遺跡です。今回の報告では、瀬戸内町の軍事遺跡に関する文献史料の中から、日本陸海軍が残した絵図資料と米軍が撮影した写真資料をご紹介します。

1. 文献史料調査とは

文献史料調査とは歴史学で行われる調査方法のひとつです。歴史学における史料とは、「過去に起こった、存在した事象について、筋道を立て把握するのに役立つ材料」のことです。この材料を総じて“歴史史料”といい、文献（文字資料）、図像（絵図、写真）、考古、民俗、聞き取り調査などの資料があります。近・現代においては映像（動画）資料も加わります。

【文献史料調査で利用した機関】

○図書館 等

瀬戸内町立図書館／鹿児島県立奄美図書館／鹿児島県立図書館／国立国会図書館
防衛省防衛研究所資料閲覧室／沖縄県公文書館／米国国立公文書館

○デジタル・アーカイブの活用

国立国会図書館デジタルコレクション／国立公文書館デジタルアーカイブ
アジア歴史資料センター／防衛省防衛研究所資料閲覧室／沖縄戦関係資料閲覧室
沖縄県公文書館／米国国立公文書館／国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」

2. 絵図資料からわかる遺跡

陸・海軍が構築した軍事施設は、国の予算を基に構築した「公共施設」でもあります。そのため、施設を構築するまでに、物価調書、売買交渉、譲渡、登記、地図、設計書、予算書、伺書、決裁書など、膨大な文字記録が残されています。その記録に絵図（設計図や地形図など）が添付されている場合があります。また、戦後の武装解除時に大島方面部隊指揮官（海軍）から米第10軍司令官への報告書に絵図をみることができます。

- ・大島全図（明治23年）
- ・久慈／奄美大島需品支庫風水害復旧工事之図（昭和4年）
- ・久慈／奄美大島需品支庫水溜上家風水害普及工事之図（昭和4年）
- ・皆津崎／大島東岸望楼飯ヒ避煉瓦塀位置図（明治33年）
- ・皆津崎／煉瓦塀切断図（明治33年）
- ・西古見／二十八柵米榴弾砲制式図（明治25年）
- ・西古見／観測用射撃用具（昭和15年）
- ・安脚場（金子崎）／金子手砲台見取図（昭和20年）
- ・安脚場（金子崎）／防備衛所（甲）設計案（昭和16年）
- ・呑之浦／震洋艇装備要領図（昭和19年）

3. 米軍撮影空中写真からわかる遺跡

「空中写真」とは、飛行機に搭載した航空カメラにより地表面を撮影した写真のことです。米軍は1944年より写真偵察機で日本各地の空中写真を撮影しました。その目的は第2次世界大戦中における対日戦の戦略・戦術遂行のためでした。また、戦後は占領政策の一環として、日本各地の空中写真を撮影しました。

奄美大島についても、戦中・戦後と空中写真が撮影されています（安溪・当山 2011）。

古仁屋（1945. 3. 27） 久慈（1946. 4. 19） 西古見（1946. 04. 19） 手安（1945. 05. 09）
瀬相（1945. 04. 29）（1945. 10. 10） など

4. 米軍撮影武装解除時の写真からわかる遺跡

米軍による奄美群島の武装解除は、1945年9月22日、徳之島より開始されました。大島海峡の武装解除は、9月25日より行われ、米陸軍部隊「第10軍」指揮のもと進められました。米軍の武装解除時の写真資料より、海峡内の各施設では武器、弾薬、器材等が海岸に集積され、海中投棄される様子を知ることができます。また、砲台など搬出不可能な構築物は爆破処理されました。

- ・実久砲台／克式15 糶加農（1945. 10. 6）
- ・実久砲台／砲側庫入口（1945. 10. 6）
- ・江仁屋離砲台／45口径10年式12糶高角砲（1945. 10. 6）
- ・江仁屋離砲台／棧橋（1945. 10. 6）
- ・西古見砲台／28糶榴弾砲（1945. 10. 6）
- ・西古見砲台／28糶榴弾砲 第2砲座爆破（1945. 10. 6）
- ・西古見砲台／棧橋（1945. 10. 6）
- ・古仁屋／古仁屋の海岸（1946. 5. 5）
- ・須手／海軍水上飛行機の基地（1946. 5. 5）
- ・瀬相／海軍基地（1946. 5. 5）

5. 映像資料からわかる遺跡

米国国立公文書館はYouTubeに公式チャンネルを開設しています。このチャンネルのプレイリスト「Japanese Airfield Installations (Ryukyus Islands), September 24, 1945」では、主に1945年9月に徳之島、加計呂麻島、奄美大島、喜界島で米軍が実施した武装解除の様子を見ることができます。この19分25秒の動画で、加計呂麻島の海軍基地（瀬相）の様子、設営隊基地（三浦）に集積された震洋艇、航空機用爆弾の集積状況（須手）などを確認することができます。瀬戸内町の武装解除の一端を知る貴重な映像資料です。

- ・1945年9月26日 加計呂麻島 4:14～ 瀬相・海軍基地
- ・1945年9月27日 加計呂麻島 6:21～ 三浦・震洋艇の集積状況
- ・1945年9月28日 奄美大島 8:31～ 須手・航空機用弾薬の集積状況
- ・1945年9月29日 奄美大島 10:40～ 墜落した日本軍飛行機（瑞雲）

※奄美大島の武装解除の動画 URL <https://youtu.be/HkM-0aSx0iM>

【参考文献 など】

- ・安溪遊地・当山昌直『奄美沖縄 環境史資料集成』2011
- ・安溪遊地・当山昌直『奄美戦時下米軍航空写真集』2013
- ・工藤洋三『米軍の写真偵察と日本空襲』2011
- ・浄法寺朝美『日本築城史』1971
- ・陸軍築城部『奄美大島要塞築城史』1943

軍事遺跡の眺め方（なぜか無口な遺跡群）

元東京大学准教授、元町文化財保護審会長 服部 正策

私が1980年から40年間勤務していた東京大学医科学研究所奄美病害動物研究施設は旧海軍の水上飛行艇の基地跡に立地している。明治時代から名瀬市内にあったハブ採毒のための大島出張所の敷地は米国統治下で公共施設になっていたの、内務省が管理していた瀬戸内町須手の米軍駐留跡地を移管してもらったと聞いている。奄美大島が本土復帰を果たした数年後の話である。

敷地の海岸まで広がるコンクリートは海岸部では波に浸食され、基礎部分のチャート(中生代に太平洋底に沈殿した放散虫のケイ酸カルシウムに起源を持つガラス質の堆積岩)が海岸に転がっている。チャートは旧海軍が加計呂麻島から運んできたと言われている。残念なことに県道の真下にあった分厚いコンクリート製の防空壕や天井が高い大きな防空壕などは県道拡幅工事の時に埋め立てられた。厚いコンクリートで作られた防空壕を破壊し撤去する工事に手間取り、工事関係者はあのまま道路の基礎にしておいた方がはるかに安定していたとぼやいていた。そういえば、研究施設の電線管を埋設する工事も手間取っていた。コンクリートの下にはチャートの礫がぎっしり埋め込まれていたからだ。ずいぶん頑丈な基地を作ったものだ。須手地区の人からは水上飛行艇は山裾の格納場所に引き上げて木の枝で隠していたという話は聞いていたが、基地の使われ方に関する情報はなかった。

奄美大島で研究を始めてから十数年後、職場の海側で海を眺めている3人が目に留まった。聞くと終戦間際にこの基地によく通ってきていたという。米軍機がいなくなる夕方に佐世保を出発して、夜に大島海峡に着水して須手の基地に物資を届け、夜明け前に佐世保に向かって飛び立っていたようだ。しかし、当山昌直、安溪遊地がまとめた「奄美戦時下 米軍航空写真集」(南方新社)には、終戦の年の春に米軍が撮影した須手地区の焼き尽くされたように見える写真が載っており、毎夜飛行艇で往復するような基地には見えない。

ところが、最近アメリカが公開した奄美群島の武装解除のフィルムには思いもしない光景が撮影されていた。徳之島の浅間飛行場で戦闘機を破壊する映像や、100隻以上の震洋艇や大量の木箱を海岸に集めている映像とともに、須手にあった大きな防空壕から運び出された爆弾や銃器などが山積みになっているの映像があった。海岸に落ちた水上飛行艇の残骸も撮影されていた。

しかし、これらは大島海峡に作られた海軍基地と陸軍の奄美要塞のごく一部であったことが、瀬戸内町文化財保護審議会の委員研修に始まった数多くの現地調査により明らかになった。

20年ほど前、瀬戸内町文化財保護審議会の委員に誘われた。会長の前田芳之氏は昆虫や植物の調査の仲間であったが、マンガン鉱山や戦争遺跡、奄美大島に隠されているという金塊や大島海峡に沈められたという水銀の壺などの夢多い話を数多く紹介してくれていた。

最初に調査に行った西古見地区の観測所には驚いた。狭い窓から見える江仁屋離や須子茂離、ハミヤ島などがその方位角とともに彩色を施して窓の上の壁面に描かれているのである。その後、明治時代に建てられた赤煉瓦が美しい久慈の貯水槽、静かな谷に突然姿を現す三浦の貯水ダム、4基の砲座に二つの弾薬庫を備える実久砲台跡、弾薬庫や観測所などが残る安脚場砲台跡、なぜか粉々に破壊された皆津崎の望楼など数多くの戦争遺跡の調査を行ってきたが、どの遺跡も想像以上の規模であった。

こういう堅固な遺跡のほかに、よくわからない構造物も見つかる。加計呂麻島の徳浜の上には、コンクリートを打った小さな水場があり、そこから深さ50cmほどの浅い塹壕が海の見える方へ枝分かれして伸びていた。数人で小さな陣地を構えようとしていたような遺構である。

油井岳山頂付近は希少な動植物の宝庫であり、地頭峠からのコンクリート舗装された軍道と呼ばれていた道をよく通っていた。道路の上は森の木々が覆いトンネルのようになっていて風情があった。現在の林道は拡幅整備されて、かつての面影はないが、森の中で希少種の調査を行っているとき、奇妙なものを見かける。コンクリートでできた四角い水溜が谷の底にポツンとあったり、3m~10mくらいの長さの中途半端な防空壕のような穴が掘られている場所もある。尾根道を歩くといたるところで目に付くのが、一辺が1m深さ1m弱の四角い穴である。大きいものは簡素な炭焼き跡だが、この小さな穴の謎は徳之島でハブの調査をしているとき解けた。ハブの調査に協力してくれた人は終戦前に奄美大島に動員されて、来る日も来る日も油井岳で穴を掘り続けていたそうだ。米兵が上陸してきたときにはその穴に隠れ、追いかけてくる米兵を狙撃するためのもので「タコツボ」と呼んでいたそうだ。

このように瀬戸内町には多くの遺跡がある。ぜひ足を運んでほしい。ただし、瀬戸内町のホームページにも遺跡には施設の崩落崩壊の可能性があること、危険な構造や立地条件にあること、私有地には立ち入り禁止、電波が届かないなどの注意喚起がしてある。発掘調査に携わったことのあるエコツアーガイドや街歩きガイドに案内してもらうことをお勧めする。

手安弾薬庫や安脚場砲台跡などは普通の服装でも見て回ることができるが、他の軍事施設跡では軍道は荒れていて施設内には水たまりも多い。ブユ、ヤブカ、ダニ類などの吸血昆虫も多いので、長靴などのしっかりした足回りが必須である。また、弾薬庫や防空壕の中にはアマミマダラカマドウマ、オオゲジなども多く、まれにハブやヒャン、アカマタなどのヘビも入っていることがあるので、懐中電灯を忘れずに持参しよう。弾薬庫や防空壕、震洋艇の格納壕には驚くほど多数のコウモリも生息している。多くはオリイコキクガシラコウモリ(環境省絶滅危惧I B類)で、まれにモモジロコウモリが混ざる。夜行性動物の眠りを妨げないように気をつけていただきたい。特に冬期は冬眠状態になっているので、眠りを覚まさないようにしよう。

余談になるが、防空壕や格納壕はオリイコキクガシラコウモリの大切な繁殖場所になっている。呑之浦の格納壕のいくつかは入口に近い場所で落盤が起きているが、山の斜面に小さな開口部がある。アリジゴク(ウスバカゲロウの幼虫)の巣のようになっていて危険な入口である。その中のコウモリ調査では、オスのコウモリだけがいる壕と、妊娠したメスのコウモリだけの壕が並んでいた。風化の進んだ震洋艇の格納壕や避難壕は落盤の危険性が高いことも注意していただきたい。

動植物の調査で奄美大島の多くの山頂に登ったが、ほとんどすべての山頂に眺望の利く岩場はない。登山道も森の中で見晴らしの良い場所は少ない。ところが、戦争遺跡は海を見渡すことができる場所に立地しているので、どこに行っても絶景を見晴らすことができる。

美しい海を眼下に見下ろせる砲台や観測所跡、森の中に突然姿を現す弾薬庫や兵舎など、奄美大島の美しい自然とは全く異質の軍事遺跡を見て、戦争のために費やした莫大な労力を想像してみたい。

日本史学・歴史教育から見た、奄美大島要塞跡の価値

聖心女子大学 つちだひろしげ 土田宏成

◎日本の近代史を学び、考えるための資料としての活用

- ・身近な場所から世界や日本の歴史を考える。
- ・なぜ奄美大島に要塞が建設されたのだろうか？
- ・近代日本の戦争は、奄美大島にどのような影響を与えたのだろうか？
- ・ワシントン海軍軍縮条約（1922年）は、奄美大島にどのような影響を与えたのだろうか？

以下では、世界や日本の動きと、それが奄美大島に与えた影響について、「奄美大島要塞跡」を中心とする軍事遺跡から考えてみる。

1、日清戦争（1894-95）と石炭庫・水溜の設置

- ・1891（明治24）年、奄美大島における最初の軍事施設である海軍の石炭庫が久慈に置かれる。
- ・1894～95（明治27-28）年、日清戦争。
- ・1895（明治28）年には、久慈にレンガ造の水溜も建設され、材料として日清戦争時に旅順で手に入れた戦利品のセメントが使われた。

2、日露戦争（1904-05）と海軍望楼の設置

- ・海軍は、見張り、通信、気象観測を行う海軍望楼を全国の海岸要地に設置していた。
- ・1904～05（明治37-38）年、日露戦争。
- ・奄美大島では、海軍望楼が日露開戦前に皆通崎、開戦後には曾津高崎、笠利崎に設置された。

3、第一次世界大戦（1914-18）と要塞の建設

- ・日露戦後、日本海軍はアメリカ海軍への対抗を目標に軍備を整えていったが、その際、艦隊の根拠地としての奄美大島（大島海峡）の重要性が認識された。
- ・1914（大正3）年に第一次世界大戦が勃発、日本も参戦し、ドイツ領の南洋諸島を占領すると（戦後、日本の委任統治領となる）、その重要性はさらに高まった。
- ・第一次世界大戦後の1919（大正8）年には、奄美大島の防備を強化するため、陸軍の要塞の新設が決まり、1921（大正10）年7月から工事に着手した。

4、ワシントン会議（1921-22）と要塞工事中止

- ・第一次世界大戦中・戦後における日本のアジア・太平洋地域への勢力拡大に対して、アメリカは同地域における新たな秩序を形成するため、関係諸国に呼びかけ、1921～22年（大正10～11）にワシントン会議を開催した。
- ・会議では、海軍軍縮、極東問題、太平洋問題が主要テーマとして話し合われた。
- ・海軍軍縮条約では、主力艦（おもに戦艦）について米・英それぞれに対する日本の保有比率が6割に抑えられるとともに、米・英・日間で太平洋地域の島々で新たな要塞や海

軍根拠地を建設しないことなどが規定された。

- ・同条約に基づいて、奄美大島の陸軍の要塞工事は火砲を据え付ける前に中止となったが、1923（大正 12）年に陸軍の奄美大島要塞司令部が設置された。

5、国際協調体制からの離脱と要塞建設の再開

- ・1931（昭和 6）年の満洲事変後、日本は国際協調体制から離脱を始めた。
- ・陸軍の奄美大島要塞でも、条約違反（新たな建設）とみなされないように「改築」「補修」「災害復旧」等の手段で、弾薬庫などの整備が進められた。
- ・1933（昭和 8）年には、日本は、国際連盟からの脱退を通告した。
- ・1934（昭和 9）年には日本は、海軍軍縮会議からの脱退も通告、1937（昭和 12）年から国際的な条約に縛られず、自主的に艦艇を建造したり、奄美大島を含む日本領の太平洋の島々で要塞の建設を進めたりすることが可能となった。
- ・1937（昭和 12）年 7 月から日中戦争が始まった。
- ・1939（昭和 14）年 9 月ナチス・ドイツによるポーランド侵攻をきっかけに、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発した。ドイツ軍が欧州を席卷すると、日中戦争の泥沼化に悩む日本では、ドイツと組むことにより、東南アジアへの進出を強めようとする動きが高まり、1940（昭和 15）年 9 月には日独伊三国同盟を締結。
- ・米英との関係はいつそう悪化した。
- ・この年に陸軍の奄美大島要塞でも、一部の砲台に火砲が設置されている。

6、日米開戦と奄美大島の防備強化

- ・日本の南進政策により対米関係が悪化するなか、奄美大島の防備も強化されていき、1941（昭和 16）年には陸軍の要塞重砲兵連隊が編制され、海軍の水上飛行機用基地、根拠地隊が設けられた。
- ・開戦後、奄美大島の基地と部隊は、大島海峡の防備、海上交通の安全確保に任じた。
- ・1944（昭和 19）年には、奄美大島に水上・水中特攻隊も配備され、陸上部隊も増強された。
- ・その後、米軍機による激しい空襲下で、近い将来の米軍の上陸を想定した陣地の構築や訓練を行っていた。加計呂麻島の海軍の震洋隊には、のちに作家となる島尾敏雄もいた。
- ・奄美大島に米軍が上陸する前に終戦となった。

まとめ

- ・「奄美大島要塞跡」から、近代史の各時期における世界の重要な動き、日本の国際関係・戦争を考えることができる。

【参考文献】

- ・瀬戸内町教育委員会編『瀬戸内町文化財調査報告書第 7 集 瀬戸内町内の遺跡 3－奄美大島要塞跡及び大島防備隊基地跡 内容確認調査編一』（瀬戸内町教育委員会、2022 年）

奄美大島海峡（瀬戸内町）軍事関係史

防衛研究所 齋藤達志

南西諸島は、古来、大陸及び南洋方面との交通路であり、文化交流などの伝播路であった。また、南西諸島の島々は、大洋を往来する船の寄港所であり、避難所であり、薪炭食料の補給地でもあったⁱ。特に大島海峡は、幅約2km、延長約20kmの海峡であり、波が静かで水深も50～70mと深く、岸は湾入の多いリアス海岸であり、大型艦船の泊地となりうる良好な地であった。このため、戦前の大島海峡は、軍事的にみて、その時代に応じて次に三つの役割を担った。すなわち、明治から昭和15年頃までは、東シナ海及び太平洋へ進出する海軍艦隊の前進根拠地として重視されていた。そのために奄美大島要塞が作られた。この中には、今回、国指定遺跡となった西古見砲台、安脚場砲台、手安弾薬本庫が含まれている。次に、日米開戦前後からは、南西諸島航路の護衛や補給及び南方作戦の中継基地としても使用されたⁱⁱ。そして三つ目として、米軍が沖縄に上陸する1945（昭和20）年4月以降、必然として奄美大島、特に大島海峡は本土防衛の第一線となり、陸海軍あわせてその守備を固めるとともに、特攻のための中継地ともなった。このように大島海峡は、一つの地域で、明治初期から終戦まで、軍事的に一連のストーリー、つまり明治以来における日本の国防の沿革とその一端が戦跡という形で残っている非常に稀な地域であると考えられる。

奄美大島海峡（瀬戸内町）軍事関係概史

年	大島海峡	陸 軍	海 軍
明治	19年		・4月26日、奄美大島が対馬沖繩を含む第三海軍区に含まれる。
	22年		・7月1日、佐世保鎮守府開庁
	24年		・5月5日、大島久慈村に石炭庫（大島炭庫） <u>新築</u>
	29年	・奄美大島要塞建設案、閣議に上申（予算計上されず。）	
	30年		・10月8日、大島炭庫を大島需品支庫に改称
	33年		・皆通望楼（奄美大島東岸）が明治33年1月21日に起工、8月1日から運用開始
	37年		・曾津高望楼（奄美大島西岸）（起工37.1.22、運用開始37.2.27）、笠利望楼（奄美大島北端）（起工37.8.29、運用開始37.9.19）
	38年		・明治38年10月19日、皆通、笠利、曾津高の各望楼廃止
大正	6年		・10月22日、連合艦隊は、海軍大臣に報告書「奄美大島ニ関スル研究調査提出ノ件」を提出
	7年	・帝国国防方針「用兵綱領」に、「海軍作戦計画は、全艦隊を奄美大島付近に集中し、小笠原列島を哨戒線として敵主力の進攻方向によって全力を挙げて出撃することを方針とする。」と、奄美大島が注目される。	
	8年	・12月5日、軍事機密第105号「要塞整理要領追加之件」（T8.12.5）において奄美大島要塞設置が決まる。	
	9年	・6月、父島、奄美大島、澎湖島等、等洋上第一線要塞の建設改編に着手 ・8月10日、築城部奄美大島支部は、等級、一等、鹿児島県大島郡東方村古仁屋に定められる。 ・9月26日、築城部奄美大島支部開設	
	10年	・7月、安脚場砲台、8～10月、実久砲台、西古見第一砲台、江仁屋離砲台、11月、皆津崎第一、同第二砲台、12月、西古見第二砲台を起工	
	11年	・2月27日、海軍軍備制限条約締結（ワシントン会議）の結果、奄美大島の要塞整理に属する築城工事が中止（工事中止当時の現状は、軍道、砲座（砲床未完）及び一部の補助建設物等の構築、備砲作業は未実施）	
	12年	・3月28日、奄美大島要塞司令部は、等級三等（軍令陸乙第二号（T12.3.28）） ・4月1日、奄美大島要塞司令部を開庁 ・4月30日、築城部奄美大島支部廃止	・3月26日、海軍需品支庫を廃し、海軍軍需支部を大島に設置 ・4月1日、佐世保海軍軍需部所属で大島に軍需支部を設置
昭和	2年	・8月6日、天皇陛下、鹿児島県奄美大島へ行幸	
	6年	・築城部支部が設備した仮設物を未填薬弾丸庫、乾燥 火薬庫、薬莢庫、監守衛舎、器材庫、砲具庫、観測所、繫船場、貯水所、軍道等の名称を付して防御営造物として構築 ※手安弾薬本庫：主に洞窟式三本、西古見第一砲台：観測所、貯水所、繫船場、火薬支庫、薬莢庫を構築	
	8年	・3月、「要塞再整理及び東京湾要塞施設復旧修正計画要領」により奄美大島要塞兵備が一部変更	
	13年		・5月8日、大島軍需支部改め、大島軍需支庫と改称
	15年	・西古見第一砲台（二八榴弾砲×4門）及び実久砲台（克式十五糎加農×2門）に備砲 ・12月2日、「奄美大島ニ於ケル陸海軍防衛造営物ノ地帯区域」告示	

参考図1

昭和	16年	南方作戦の中継基地	<ul style="list-style-type: none"> 9月10日、奄美大島要塞に対し、要塞司令部、要塞重砲兵連隊（19年5月15日、重砲兵第6連隊と改称）並びに要塞病院の臨時編成下令 11月8日、奄美大島要塞に準戦備が下令、第1日を11月12日と定める。 	<ul style="list-style-type: none"> 8月、古仁屋に航空基地、奄美大島（水上基地）が概成 参考図2 10月1日、大島根拠地隊（大島防備隊、大島通信隊）編成
	17年			<ul style="list-style-type: none"> 1月15日、大島根拠地隊廃止、麾下兵力は、佐世保防備戦隊に編入
	19年	本土防衛の第一線	<ul style="list-style-type: none"> 3月22日、第32軍が本営直轄として創設 4月1日、奄美大島要塞重砲兵連隊、要塞歩兵第28中隊、奄美大島病院は、第32軍の隷下となる。 5月19日、独立混成第21連隊（球7156）編成完結、独立混成第21連隊長は、第32軍司令官直轄の奄美守備隊の指揮官として徳之島に位置し、奄美大島の重砲兵第6連隊を指揮 7月24日、独立混成第64旅団司令部、独立混成第22連隊編成完結 9月1日、重砲兵第6連隊の砲兵1個中隊（火砲6門）を旅団直轄砲兵として徳之島に派遣。 10月10日、米艦載機の初空襲 	<ul style="list-style-type: none"> 4月10日、沖縄方面根拠地隊と第4海上護衛隊が新設 8月9日、沖縄方面根拠地司令部（第4海上護衛隊司令部）は、瀬相在泊の旗艦から小禄の航空基地に移動 参考図3 10月15日、第17震洋隊と第18震洋隊編成、11月20日加計呂麻島、呑之浦に進出 12月15日、佐世保海軍航空隊古仁屋派遣隊は、佐世保鎮守府所属の第951海軍航空隊古仁屋派遣隊となる。
	20年		<ul style="list-style-type: none"> 3月25日、海上挺進第29戦隊（暁第19768部隊）第2梯隊が、古仁屋入港、阿鉄湾にはいる。 6月25日、混成第64旅団は、第10方面軍（台湾）隷下から第16方面軍隷下に編入 	<ul style="list-style-type: none"> 3月25日、佐世保鎮守府は、沖縄に進出中の魚雷艇の行き先を大島に変更するとともに、甲標的丙型3隻（201号、202号、203号）を大島に進出させ、両者を大島防備隊司令の一時指揮下に入れた。 4月15日、北緯37度10分以上、北緯30度10分以南の所在海軍部隊をもって、大島方面隊（司令長官加藤唯男海軍少将）編成、南西諸島防備指揮官（沖縄方面根拠地隊）隷下 7月、陸戦隊を編成（准士官以上95名、下士官、兵、その他2757名） 参考図4

i 高田利貞『運命の島々—あま美と沖縄—』（同朋舎、1958年）38頁。

ii 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 本土方面海軍作戦』（朝雲新聞社、1975年）418頁。

ちよつとこゝらで、tea break

怒涛の舞台裏を、すこしだけご覧あれ。



みなさまのおかげです。感謝しています。

瀬戸内町埋蔵文化財メンバー 一同より

水中遺跡と軍事に関する遺跡

近年の文化財行政において、特に埋蔵文化財包蔵地の取り扱いでは、水面下の遺跡を水中遺跡とする明確な方針が確認されてきた。『水中遺跡ハンドブック』（文化庁 2021）によれば、「海域や湖沼等において常時もしくは満潮時に水面下にある遺跡」を水中遺跡とし、軍事に関する近代遺跡の特徴にも言及がある。（文化庁 2021: 54）。太平洋戦争期の水中遺跡については、その遺存状態が、比較的良好な場合が多いとされ、そのため、遺跡として市民への訴求力が高いとされる。一方で、埋蔵文化財として取り扱うことへの慎重な対応を求めている。これは、形状が分かるほどの良好状態の場合、戦没者の記憶（墓標）として水没船舶・航空機は遺存しており、さらに不発弾・重油燃料・化学薬品等の残留物の問題に加え、船体の崩壊という危険性が水中で発生する可能性があるからとされる。さらに海域に沈む艦船が自国船でない事例もあり、旗国との調整も発生するとされる。こうした問題に、把握対応した上で、水中戦跡として保護されるのが望ましい。

諸外国の水中戦跡保護の事例

研究、行政上も水中戦跡が調査保全される事例を、諸外国に求めることができる。太平洋地域での日本船籍の艦船や徴用船は、パラオ共和国での文化遺産としての事例が早くから把握されており、近年も陸上・水中一帯の戦跡報告が出された（石村 2021）。また筆者は、ユネスコ・アピアオフィスと協力して、太平洋地域のいくつかの国における水中戦跡への取り組み、ダイビングスポットともなっている水中戦跡の現状と課題の報告書をまとめた（UNESCO 2017）。

水中遺跡（水中文化遺産）の用語として shipwreck（＝沈没船）あるいは wreck があるが、後者 wreck には船舶ほか航空機も含まれる。太平洋戦争中、旧日本軍によって多くの戦死者を出した 1942 年 2 月オーストラリア・ダーウィン空襲では、艦船・航空機が多数沈んだ。王立オーストラリア空軍航空機などを対象とし Aviation Archaeology（軍用機考古学）による空爆歴史理解が試みられている。また、1942 年 5 月旧日本海軍特殊潜航艇 3 隻がシドニー湾を攻撃、2007 年にそのうちの 1 隻が発見された。その後、ニューサウスウェールズ州は、M24 Japanese Midget Submarine wreck site として考古遺跡の登録を行い、同州法下での保護措置をとった。

アメリカでは、文化庁相当の諸官庁は無いが、2004 年制定の沈没軍事法（Sunken Military Craft Act）によって合衆国海軍帰属の沈没艦船及び自国領海内の他国艦船の調査保護が義務付けられおり、海軍歴史遺産部隊が設けられ、水中考古学専門家が配置されている。南西諸島の沖縄では領海内の USS エモンズほか、つい 3 年前に年少兵が乗船した湖南丸を撃沈した USS グレイバックが排他的経済水域で確認されている。商務省下には、海洋大気庁が設けられているが、所管の保護区内の水中戦跡保全業務にあたっており、ミッドウェー環礁海域に沈んだ旧日本海軍空母保全に向けた動きがある。

駿河湾沿岸の特攻関連戦跡

静岡県駿河湾を望む日本平周辺には本土決戦関連の戦争遺跡が所在し、「静岡平和資料センター」が調査・情報公開を行っている。駿河湾沿岸域には、旧日本海軍特攻兵器関連施設が所在し、下田沖合には特攻兵器である海龍が海底で確認されてきた。本土決戦に備えて、旧日本海軍は、横須賀の第一特攻戦隊の統括下、駿河湾岸へのアメリカ上陸を阻む目的で、現在静岡市清水区の三保や御前崎ほか、西伊豆の第十五突撃部隊（本部：沼津・江ノ浦）と東伊豆の第十六突撃部隊（本部：下田）を編成、伊豆半島沿岸の急崖地形を利用して、特攻兵器基地を建設した（岩脇 1995、竹内 1998）。竹内（1998）は、駿河湾沿岸の回天、蛟龍、海龍、震洋を格納する海食崖の壕の位置を周辺地形と共に、詳細に報告している。

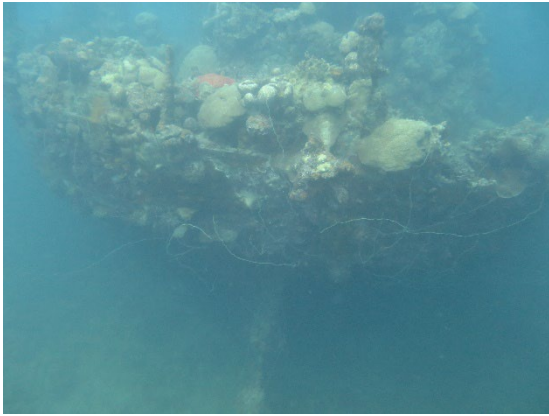
現在も沿岸戦跡三保半島保半島には、旧日本海軍の特攻兵器「震洋」の格納庫であった掩体壕が 6 基現存、その歴史的価値周知の必要性が指摘されてきた（浅見・伊藤 2009）。1945 年コンクリート製の掩体壕が、本土決戦に備えて震洋隊によって 12～16 基建造されたが、配備は 5 隻にとどまった。西伊豆の江ノ浦、戸田、土肥、安良里、田子の小浦の崖沿いには特攻兵器用の壕が掘られた。江ノ浦に海龍が 16 隻、震洋艇 5 隻が配備された。壕は、戦後の崖際の道路整備で崩落したものが多いが、田子の事例のように内部にレールの枕木が確認でき、案内板が設置されている場所もある。壕以外にも、特攻兵器を降ろす潮間帯の斜路の位置が、現在でも特定できる。

特攻関連の水際戦跡と海没処分の水中戦跡

下田市和歌ノ浦、現在、下田海中水族館が所在する浦には、戦後、震洋艇が処分されたとの指摘があるが（竹内 2009）、潜水調査での確認には至らなかった。水族館敷地内の格納壕は、資材置き場として利用されているほか、浦を取り囲む崖に掘られた壕の多くは入口が塞がれている。現在の下田港柿崎の海岸遊歩道沿いには、藤沢海軍航空隊より特攻基地建設のため派遣された海軍特別年少兵（当時）建立の碑があり、その背後の海食崖に壕が穴を開けている。壕の目の前の潮間帯にはコンクリと礫積みの斜路が残存している。海龍については横須賀からの回航途中での須崎での座礁ほか、戦後、海龍 16 隻が米軍によって没収、海没処分された可能性がある。下田沖では、1999 年 9 月 2 日に下田港の防波堤工事を行っていた伊豆海洋によって発見の報がもたらされたほか、下田市の海洋探査会社ウィンディーネットワークによって 2015 年、2021 年に保存状態の良好な海龍が海底に鎮座している状況が確認され、写真測量が実施された。

参考文献

浅見幸也・伊藤和彦 2009 「特攻艇「震洋」と三保半島」『静岡県の戦争遺跡を歩く』静岡県戦争遺跡研究会（編）、石村智 2021 「パラオに沈んだ日本船」『図説世界の水中遺跡』、岩脇彰 1995 「東海地方の本土決戦体制」『幻ではなかった本土決戦』歴史教育者協議会（編）、竹内康人 1998 「静岡県の特攻基地建設」『静岡県近代史研究』第 24 号、竹内康人 2009 「伊豆半島の特攻用地下壕」『静岡県の戦争遺跡を歩く』文化庁（編）2021 『水中遺跡ハンドブック』文化庁、UNESCO 2017 *Safeguarding Underwater Cultural Heritage in the Pacific: Report on Good Pacific in the Protection and Management of World War II-related Underwater Cultural Heritage*.



パラオ共和国に沈む日本船籍のヘルメット沈没船 (Helmet Wreck Site)。同国では Historic Preservation Office が、国内法で保護されている陸上・水中の戦跡の保全に業務を担う。同国海域では約 50 隻の船舶が沈んだと記録があり、20 隻程は位置が特定され、ダイビングスポットともなっている。一方で、上記の遺跡のように、掃海機雷が水底に残存する場合、アクセスは制限される。(写真：木村)

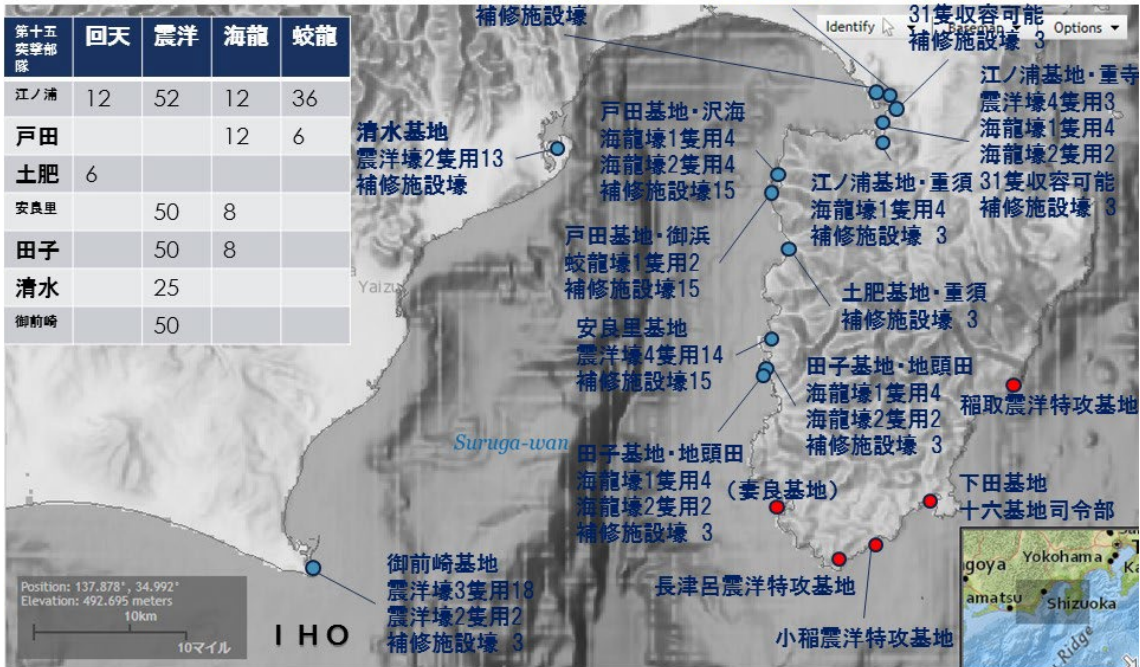
駿河湾沿岸に残る旧日本海軍特攻兵器関連跡

岩脇 (1994)、竹内 (1998) 参照

江ノ浦基地・江ノ浦
回天壕2隻
蛟龍壕2隻用1
蛟龍壕1隻用2
補修施設壕

江ノ浦基地・多比
回天壕2隻用5
震洋壕4隻用3
補修施設壕 4

江ノ浦基地・口野
十五基地司令部
回天壕1隻用4
震洋用地下施設
31隻收容可能
補修施設壕 3





西伊豆・田子の震洋艇壕
 (写真：木村研究室・埋田)



下田・和歌ノ浦震洋艇壕
 (写真：木村研究室・埋田)



下田・柿崎海龍格納壕
 (写真：木村研究室・埋田)



柿崎遊歩道潮間帯斜路
 (写真：木村研究室・埋田)

5. 探査技術の応用

複数の探査技術を用いることによって、探査結果を相乗した成果を得ることもできる。無人潜水機の映像を三次元化処理し、マルチビーム測深機の立体点群データと組み合わせることで、精度が高く、視覚的にも優れた透視の立体デジタル画像や動画を作成することができる。

こうしたデジタルデータは、把握・周知から活用あらゆる段階で活かすことができる。また、成果を解析することによって、水中の詳細な三次元データを得ることもできる。

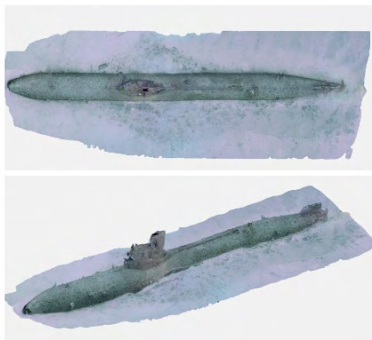


図3-4-5 静岡県下田市沖に沈む特殊潜航艇「海龍」三次元画像
 透視や透視の形状が高精度で取得されており、三次元画像から平面図等を作成することも可能である。(a)、さらに、透視や透視の形状をイメージしやすい画像 (b) を作成することも可能であることから、水中透視の活用における利便も期待される。



三保半島震洋掩体壕
 (写真：木村研究室・埋田)

『水中遺跡ハンドブック』で紹介されている下田港沖発見海龍の写真測量データ。
 写真測量データウィンドーネットワーク

奄美大島要塞跡は何がすごいのか 期待と課題

市民ミュージアム大野城心のふるさと館 赤司善彦

はじめに

奄美大島要塞跡は、大島海峡付近に遺構が集中的に残存し要塞全体の理解が可能なこと、さらに近代日本の国防施策と密接に関連する遺跡群であることなどが評価されて国史跡指定となった。一つの到達点だが、要塞跡保護（保存と活用）の始まりでもある。また、未長く史跡を保護（保存と活用）するには、行政内の協働と住民参画が欠かせない。

1 何がすごいのか

遺跡の本質的価値は明治時代から太平洋戦争末期まで、そのスケールの大きさが全国的に見て稀有な例である。また、個人的には砲台の置かれた場所は眺望地であり、海をながめる場として貴重である。さらには地元の方々にとって誇りとされていることである。

要塞は外敵から重要な場所を守るために築かれた構築物である。古代や中世の山城、南島のグスクと同じで戦略的要地に各種施設を配置している。その地理的環境と軍事的環境を念頭に置いて奄美大島要塞跡のスケール感を純粋に歴史的な遺跡として楽しんでみることができる。例えば、どのように守るのか（前提条件 規模・配置 装備わかる範囲で）を考えながら遺跡を見て回る。山城の要素（眺望の確保 敵の動き察知 自軍兵力や防御態勢の隠蔽 攻撃方法）や、縄張り（要塞の施設や人員の配置による空間構成）、敵の攻撃からの防御（砲台等の隠蔽）、城の出入り（要塞の補給路・人員の連絡通路など）、火力の発揮方法（砲台のネットワークなど）を自分なりに考える。そのため案内ガイドも必要。

2 戦争遺跡の考古学と埋蔵文化財行政での位置づけの歴史

（考古学）歴史学では明治以降は軍部が軍事史研究を進めていたので立ち入らなかった。戦後も戦争への反省から軍事史研究は長くなされておらず、城郭史ですら軍事を正面から避けていた。城郭は権力の所在、社会経済、地域支配などの観点からの研究がなされていた。そのため、城郭史や軍事史は在野の研究者が中心となって進めていた。近代の戦争遺跡もアンタッチャブルに近い扱いだっただけでなく、

転換したきっかけは、1984年に沖縄県の眞嗣一氏が「戦跡考古学」という用語を提唱したことである。戦争遺跡や戦争遺留品を科学的に追求して戦争の実相にふれることを目指した。その後、少しずつ戦争遺跡の調査事例が増加し、考古学界では『考古学ジャーナル』の1987年に「現代史と考古学」のなかで戦争遺跡が取り上げられ、2016年に戦跡考古学—沖縄・本土の防衛が特集された。

（埋蔵文化財）1990年文化庁は「日本近代化遺産総合調査」を開始した。1990年に沖縄県南風原陸軍病院を町指定、1995年に原爆ドーム国指定史跡し1996年世界遺産となるなどの動きが出てきた。1994年に文化庁は埋蔵文化財として取り扱う遺跡の範囲として、近現代に属する遺跡は地域において特に重要なものを対象と位置付けた。以前は埋蔵文化財の対象外だったのである。今回の調査は埋蔵文化財の「町内遺跡発掘調査等事業」の一環で実施している。戦争遺跡は各地で調査が進むので、奄美大島要塞跡は教科書的存在となる。

3 持続可能な取組 町の体制づくりと市民参画

今後の取組として、今回の指定範囲は極めて小さい範囲であり、史跡指定拡張は計画的に進める必要がある。遺跡のデジタル保存も今後重要。推進の体制作りも急務である。

ところで、遺跡のもつポテンシャルは歴史的価値だけではない。各種の団体、地権者、地域住民によるさまざまな視点からの価値の掘り起こしが必要である。また、行政主導ではなく、行政はあくまでも地域を支援する姿勢が求められる、さらには他部局との協働によって推進することが肝要だと思う。

(地域住民のアイデンティティの掘り起こし) 奄美大島要塞跡の史跡整備を通じてその魅力を発揮させること。私たちの町にはこんな素晴らしいストーリーがあったということ、住民の皆さんが再確認すること、そして地元住民が誇りに思うような取組が重要。

(観光への文化遺産の活用) 住民の皆さんに奄美大島要塞跡の内容が周知されることと併行し、国内外へその魅力あるストーリーを発信しなければ、十分な活用が望めない。そのためには、戦略的かつ効果的な発信が求められる。観光資源としていかに磨き上げるかにかかっていると云っても過言ではない。有識者の意見を取り入れることや、観光部局を始め関係部局が一致団結して協働する。(歴史散策×健康づくりなど楽しく両立させる)

(他の市町との連携) 市町を越えた文化遺産等の拠点回遊するような人の流れを、どのように生み出すのかが大きな課題である。そして観光客を受け入れる拠点づくりや、テーマに合わせた回遊ルートの設定が必要だが、その移動手段の確保も重要である。回遊性の向上など、他の市町と一緒に知恵を絞って頂く必要がある。

最後に、一口に地域との連携といっても、実際にはなかなかむずかしい。手を携えてともに歩きましょうといっても、相手との歩幅が合わず、会話も弾まないような楽しくもない散歩のようなものになる可能性もある。連携が実を結ぶには、そもそもなぜなぜ連携の必要があるのか、そして一番大事なことはお互いにとってどのようなメリットがあるのか、そうした共通理解がなければ、聞こえの良い「連携」に終わるだけであろう。

4 取り組み事例

○沖縄県南風原陸軍病院壕

首里に第32軍司令部の兵站地として、町内に司令部の一部や陣地が置かれた。

- ・1990年町指定文化財 沖縄陸軍病院南風原壕群 (発掘調査に証言や記憶を照合)
- ・整備方針基本理念 戦争に起因する負の遺産も文化財として価値がある文化財
- ・整備基本方針 学びの場 祈りと平和創造の場 憩いの場

「壕の教育力」 壕に入る人の感性を揺さぶり戦争認識へと向かわせる力

○大分県宇佐市(海軍航空隊)保護の取組

昭和14(1939)年宇佐海軍航空隊が開隊し、艦上機(航空母艦から発着する航空機)の搭乗員を養成するための訓練施設が設置されている。現在でも、軍用機を格納した掩体壕や、機銃掃射の痕が残る落下傘整備所など、多くの戦争遺構が残されており、「平和の大切さや命の尊さ」について感じ考える機会を創出するため、戦争遺構の保存を推進している。

- ・1995年 市指定史跡 城井1号掩体壕 1998年に史跡整備
市民参画 ボランティア団体「豊の国宇佐市塾」現地調査・講演会開催
- ・平和ミュージアム建設準備 子どもたちに身近な歴史を学習してもらおう場

○九州国立博物館ボランティアによる武寧王生誕伝説の島調査 (以上)

遺跡の概要

奄美大島要塞跡は、奄美大島と加計呂麻島に挟まれた大島海峡西口を中心に建設された陸軍の要塞跡です。奄美大島要塞は1921（大正10）年に砲台建設が開始され、世界情勢に即した国防施策により、断続的に建設が継続されました。大島海峡防備のため築かれた要塞は、その後、アジア・太平洋戦争終結まで使用されました。

奄美大島要塞跡は、大島海峡付近に要塞の遺構（施設跡）が集中的に残存し、要塞全体の理解が可能であり、ワシントン海軍軍縮会議や太平洋戦争の開始など、近代日本の国防施策と密接に関係する遺跡群であることから、日本の近・現代史を理解する上で重要な遺跡であるとの評価を受けました。

奄美大島要塞跡の構成遺跡

西古見砲台跡は瀬戸内町西古見に所在する遺跡です。1921（大正10）年に砲台建設が開始され、1940（昭和15）年に28糎榴弾砲が配備されました。大島海峡西口より侵入する敵艦を阻止するため、砲台を設置しました。観測所は公園化されており、観測用窓上部壁には、海峡内の島影が精緻に描かれた絵図を見ることができま

西古見砲台跡



安脚場砲台跡は瀬戸内町渡連に所在する遺跡です。1921（大正10）年に砲台建設が開始され、陸軍撤退後は、海軍により使用されました。大島海峡東口より侵入する敵艦を阻止するため、管制機雷を設置し、衛所で聴音監視を行っていました。公園化されており、施設を見学することができます。

安脚場砲台跡



手安弾薬本庫跡は瀬戸内町手安に所在する遺跡です。1931（昭和6）年頃より、奄美大島要塞全砲台用の弾薬庫（火薬庫）として建設されました。弾薬庫は3基建設され、いずれも「洞窟式」で、内部は2重構造となっています。現在、第2および第3弾薬庫を見学することができます。

手安弾薬本庫跡



遺跡見学時のご注意

- ・遺跡は、建設から80年以上経過しており、崩壊の危険がございます。長く保存するためにも、施設に触れないようにしてください。
- ・危険な箇所が多くございますので、安全に十分ご注意ください。
- ・民有地もございますので、公園以外は立ち入らないでください。
- ・電波の届かない箇所も多数ございますので、単独見学はお控えください。

お知らせ

■瀬戸内町内の近代遺跡シンポジウム

2月11日(土)きゅら島交流館にてこれまでの調査報告などを行うシンポジウムを開催します。上記の3遺跡も含む内容です。ご参加をお待ちしています。
※詳細は7ページのお知らせ欄および町ホームページをご覧ください。

■瀬戸内町内の近代遺跡のパンフレット & マップ（春頃配布予定）

上記3遺跡を含む6遺跡について、詳細を記載したマップ（6種）とパンフレット（1種）を作成中です。完成後は全戸にお届け予定です。

瀬戸内町の「奄美大島要塞跡」が 国指定史跡の答申を受けました



©(株)奄美群島環境文化総合研究所



詳細は町ホームページにも掲載
していますので、ご覧ください。

国の文化審議会は、令和4年12月16日(金)に開催された、同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、本町に所在する「奄美大島要塞跡(あまみおおしまようさいあと)」を国の史跡に指定するよう、文部科学大臣に答申しました。

この答申を受け、官報に告示されますと、「奄美大島要塞跡」は正式に国指定史跡となります。

この答申を受け、官報に告示されますと、「奄美大島要塞跡」は正式に国指定史跡となります。

今回の国史跡指定となります遺跡は、奄美大島要塞跡の構成遺跡のうち、「西古見砲台跡(にしこみほうだいあと)」、「安脚場砲台跡(あんきやばほうだいあと)」、「手安弾薬本庫跡(てあんだんやくほんこあと)」の3遺跡となります。

主催：



鹿児島県大島郡
瀬戸内町教育委員会



令和4年度文化庁補助事業
「地域の特色ある埋蔵文化財活用事業」
